アナキズムのデフレ現象 (1)

──書評・ジョル『アナキズム』──

下妻　淳三

本誌の七、八、九月号の三回にわたって、カー『バクーニン』についてM・ネットラウが執筆した書評が訳されたが、なぜ今まで日本はもとより海外においてもこの論文が広く公表されなかったか、残念に思う。おそらくネットラウはカーの著書がいぜんとして大道を濶歩するのを見て地下でハギシリしていることであろう。一九七三年になってもカーに依拠した鱓のハギシリ（A・マスターズ『バクーニン・アナキズムの父』を指す）がまたもや聞こえるとき、本誌があの論文を掲載したのは快挙である。明後年はバクーニン死後一〇〇年であり、アナキスト・ブローカーがバクーニンを論ずるであろうことは推測されるが、せめて本論の読書だけはカーにまどわされないようにしたいものである。ネットラウのこの書評によって『バクーニン』はもとより、モニュメンタルな著書とされる『ロシヤ革命史』をはじめとするカーのおびただしい著書の評価が（とりわけドキュメンテーションに関して）変るかどうか、注目したら。私の考えでは、『バクーニン』に限っていうなら、「本書は、少なくとも大要においては、オリジナルな材料や研究が描く像ではなく、著者のイマジネーションのバクーニンなる人物を提示している」という筆者の評価は正鵠を射ていいるように思われる。

ところでカーの著書はほぼ全部が日本語に訳出されているようであるが、その一冊に『歴史とは何か』があり、かなりの話題を日本でもよんだことは記憶に新しいが、本書（そしてトロッキー）を重要な一つのキッカケとして執筆されたのがJ・ジョル『アナキスト』であった。これが近く岩波書店から刊行されるというで、それが恰も「定評ある」あるいは「権威ある」という評価が与えられかねないのであるが、刊行直後の書評から判断するかぎり、本書の評価はきわめて多様であって、これぐらい種々に評価されるアナキズム文献は少ないのではないかと思われるほどである。すでにその著書が邦訳されているP・アヴリッチ、M・ノーマッド・リチャーズ、N・ウォルター、G・リヒトハイムを含め、私の知るかぎりでも、書評の数は二〇を越える。それらを参考にしつつ、同書の書評を試みたいと思う。といっても本訳書は未刊なので今回はそのことを頭におき、ジョルが書かなかったことを指摘し、そのことによって本書がけっして本格的な研究書ではないということを指摘したい。しかし、

書かれたことに関するかぎり、すなわち、アナキズム批判という視点からするかぎり、その批判に耳を貸すに値しよう。本書において著書が対象としているアナキズムは、けっして歪曲されていないとはいえ歪少化された、つまり、デフレートされたアナキズムであって、一言で本書に評価を下すなら、本書はデフレートされたアナキズムに対するレスペクタブルな批判書である、ということができるであろう。

2

ある思想体系のある争点をとらえ、くり返してかまびすしくさまざまの視点からそれを論ずることによって、その争点がいつしか無意識のうちにその思想体系の中核と誤認されてしまう場合がある。たとえば、アナキズムにおけるテロリズム、反国家がそうである。ジョルの本書は、このように、ややピントはずれのアナキズムを論じているのであって、

アナキズムを論ずるならその真髄を正しく把握せねばならない。焦点の定まらないジョルのアナキズム観は随所に登場する。彼の説くアナキズムは牧歌的なアナキズムであり自由な市民のアナキズムであって、アナキズムをきわめて「前現代的」（現代ではすでに役割を終えたという意味）に論じているのであるが、そのアナキズムの中に脈打つアナキズムの契機が含まれているのである。

ジョルの見落したアナキズムの精髄を、私はトルストイズムの中に求めたいと思う。

本書においてはトルストイを頂点とするアナキズムの系譜に殆ど触れられていない。トルストイに限ってみるなら、せいぜい非暴力と反戦との関連で言及され、その著作も『戦争と強制兵役』がとりあげられているだけである。この著書は『神の王国は汝らのうちにあり』の一部であるが、ジョル（そして訳者）はこのことに気ずいていたであろうか。それはともかくとして、『神の王国……』についてビリューコフは次のように述べているが、きわめて傾聴に値する。

「レフ・トルストイはこの著述の中で、現代の国家組織を問題にし、ひどく否定的に扱っているので、この著述はレフ・トルストイをアナーキストの一人に数える最初の動因となったのである。しかもこのことは一定の前置き言葉をつけるならば、正しいと認められねばならないのである。が、大切なのは、レフ・トルストイのアナーキズムが、すなわち強制的組織と権力との否定が、霊的再生を得てキリストの教えを我が有とした人間は彼自身の内部に人間の掟によってさらに支持する必要の少し

もない愛と真理との侵し難き神の掟を持っているのだという見解を、根底としている事である。したがって、レフ・トルストイのアナキズムは、我らを無秩序と乱脈とに導かず、至高の道徳的秩序と公正な生活とに導くのである」。

この評言に注釈する必要はなかろう。ジョルが『さらばわれら何をなすべきか』その他を読んでいたなら、バクーニンに代表されるような騒々しいアナキストたちの英雄伝とは異なった著書ができあがっていたであろう。もとより、トルストイズムはあまりにも個人的、内面的すぎるという批判もあろうが、主体、別して個人の変革なくしてどうして他者や社会の変革を期待しえようか。全人格的にトルストイはここでも私たちに範を意図せずして垂れている。自己の信念に対する義務の遂行、規範としてのアナキズムのあくことなき追求、その追求の過程での自己変革、その過程で必然的に迫られる社会変革の要請、等々こそが、彼の多くの著書とともに、トルストイズムを形成するのである。このトルストイズムは牧歌的あるいは自由な市民のアナキズムにもあるのであって、ジョルはそれを黙殺してアナキズムを博物館に陳列する。著者はテロリズムに多くのページをさき、仰々しくアナキズムを叫ぶアナキストに目を奪われているが、このこととトルストイズムの圧殺はメダル両面である。

著者はアナキズムの「隣接思想」にあまり深く立ち入らない。特に私が不満に思うのにアナキズムとカトリシズムの相互連関である。K・ラーナーは、自分がキリスト者であることを自覚せず、また他の人々も彼がそうであることを気付いていないようなキリスト者を「知られざるキリスト者」と呼んだが、このヒミツにならっていえば、カトリックの中には多くの「知られざるアナキスト」がいる。あまりにも有名なH・アンナシー、E・ムーニエ、J・マリタン、G・マルセル、S・ヴェーユなど、まだまだ列挙できよう。自然法、人格、共通善、共同体の概念が二つの思想を架橋するのであるが、ジョルはそうしたこと一切を素通りする。とにかくアナキズムの黒旗を高々とかかげないとジョルの目には入らないらしい。だから著者と同じイギリス人でありながら、リカード派社会主義者、ギルド社会主義者、B・ラッセルは、おそらく彼らが黒旗を前面に押し出すこと少ない故に、ジョルの注目をひかなかったように思われる。

「アナキストとサンジカリスト」という章を設けたのであれば、記述を一九一〇年前後で終えずに、一九二〇年代後半と三〇年代前半に、西欧の多くのアナキストやサンジカリストをまき込んだ大論争（おそらくアナキス

ト陣営内の史上最大の論争）を当然ながら概観しておく必要があろう。ヴォーリン、アルシーノフ、マフノ、マキシモフ、ネットラウ、マラテスタ、ベルネリ、グラーヴも参加した論争といえば、どれだけスケールが大きかったかはおおよその見当がつこう。この論争の集約と総括はごく大ざっぱではあるけれども、先年フランスのあるグループが行なっているが、むろんジョルは知らないであろう。今アナキズムを語るとすれば何よりも生きたアナキズムを語らねばなるまい。そのとき、何らかの形でこの論争をくぐり抜けねばならないが、ロシヤ革命とその変質を身をもって体験したアルシーノフが口火を切り、マラテスタが最も精力的にかかわった論争が提起した諸問題は遺憾なことに未解決のままに放置されている。アナキストが歴史から学ぶとすれば、この教訓に富む論争と対決すべきであろうし、その対決の過程でアナキズムとマルキシズムの交流が可能か、可能とすればいかにしてか、が問われることになろう。（参考までに述べておくと、この論争の日本版が純正アナキストとアナルコサンジカリストの論争であった。）

本書はある程度アナキズムを知った人々に勧められるべきであろう。A・マルローは『征服者』のなかである登場人物をして「ジャン・グラーヴといえばわしにとっちゃひとりの人間じゃなくて、わしの青春時代なんだから。……」と語らせているが、本書のどこからもそのような感動は期待すべくもない。総じてジョルの本書の対象はかなり通俗的であるが、それはそれで一応首肯しておいて、その対象の冷笑的な論述を検討することにしたい。

3

内容とは別に私が訳書で特に注目している点をいくつかあげよう。

「リバタリアン」にはどのような訳語がつけられているであろうか。最近のアナキズム文献ではほとんどが強いて日本語をあてはめず、原語をそのままカタカナ表記にしているようである。だが、もし本訳書で「リバタリアン」が用いられるなら、「エガリダリアン」はどのように扱われるであろうか。後者は前者ほどには日本語化されていないだけに新造語が登場するであろうか。日本語に置き換えるとすればどこかに「自由」と「平等」が配置されるであろうが、いずれも岩波大英和にはないだけに、どう処理されるか興味深いところである。

次に、注以下の諸員にあげられている文献の著者名、書名、刊行地、刊行年の誤記と不統一は、注意してみると、かなり目につくが訳書ではどうなっているであろう

か。一例をあげると、エマ・ゴールドマンの自伝は一九三一年と三二年、『ロシヤにおける私の幻滅』は一九二三年と二五年が両用されているといったぐあいである。

同じようなことだが、J・モストのファースト・ネームは「ジョン」と「ヨハン」と混用されているが、訳書ではどうなっているであろうか。

V・リチャーズによれば本書には約二五〇の誤まりがあるそうだが、果たして本当であろうか。ベルクマン死去はベルクマン自殺でなければ誤まりとする類を数えあげればそうなるかもしれないが……。またリチャーズは孫孫引きのことにも触れ毒ずいているが、ジョルはそれほどひどくはない。むしろコツコツと典拠を明示し、孫引きしたらしたでそのことを率直に明記するジョルの態度を買いたい。（内容についてのコメントは訳書の刊行後に日をおいてからにしたい）

（つづく）

リベルテールサロン近況

既報のとおりサロンは「コージ」という喫茶店で、火曜日6時から8時頃まで開かれています。天気の良い日には15名近く足を運んできて、店の片隅は私達専用の観を呈します。毎週届く「リベラル」「ラモーバ」等10数通の新聞や手紙、国内の各種団体のビラやパンフをテーブルの上にひろげて、興味ある話題をとりあげたり、お互いの近況等を気楽に語っています。場所柄、神田の古本街から掘出物をみつけてきて皆に見せてダベるのも楽しみです。それらを通して今の生活に疑いをもち何とか変えていこうと考えているのは、自分一人でない事に力づけられます。けれども毎週必ず同じ顔ぶれという訳でもなく、年令や仕事のある人や学生やらの違いもあって継続的に話題を深化させるのには不適当な面もあり、意気込んで理論を引下げてきても来て5人ぐらいしか人がいなくて気をそがれるほど穏かすぎる日もあります。お茶の水駅で降りて明大や中大を横目にみて駿河台の坂を下り、古本街をのぞき見しながら、ウニタに寄って日大の横を抜けて水道橋の「コージ」に来るコースは散歩にもうってつけです。

不当な搾取や退屈な授業に怒りを感じているあなたも共にコーヒーをすすりながら話しをしましょう

革命―今日それは何を意味するか？(1)

ヨーロッパ某国の社会主義者

日本のような先進国での真正な革命闘争において、最も重要なことは、第一に、その闘争が、はたして現存の資本主義社会への疑問を呼び起こすものであるか、第二に、その闘争が、資本主義に代わるものとしての完全に異なった型の社会を提出しているか、ということであろう。そして、これを実行するためには、少くとも次のことだけは必要なはずである。すなわち、我々大部分の生命を歪め、片輪にしているこの資本主義とは何であるかを、明確に理解すること。私を常に驚かせてやまないのは、自称「革命家」と称する人々の多くが、資本主義理解のひとかけらも持ち合わせていないことである。ということは、彼等は、その欲するところの新しい社会の型の首尾一貫したイメージを提示することができないということである。現体制の深い把握と批判なくして、どうして、来たるべき社会を語ることができるのだろうか。この小論で私は、私にとって、資本主義社会の性格とは何か、何がその中核をなしているのかを簡単に説明し、かてて、私が、資本主義社会のかわりに欲するところの新社会の型の提示を試みたいと思う。

マルクスの論を一字一句受け入れる必要は全然ないけれども、このことは認めないわけにはいかない。すなわち、それまで歴史上に存した先行の社会と比較して、何が資本主義をそれらの社会と異なったものにしているか―富が、「商品の巨大な蓄積」の形をとっている点である。資本主義社会の生産は、圧倒的に商品の生産である。品物と様々の業務は、市場で売られんがために企画され、生産される。そして市場で、商品に含まれている「剰余価値」（ここでしばらくマルキストの用語を使おう）―それは①労働者階級から搾り出されたもの―が具体化される。市場のための、広汎な一般化された生産の制度というものが、資本主義に特有な問題をもたらしているということを見抜いたのは、もちろんマルクスが最初ではない。また、新しい社会の名のもとにこのような生産制度に挑戦したのも、彼が最初の人ではなかった。彼以前の人々―特にフーリエのような「ユートピア社会主義者たち」―は、すでにこの挑戦を試みていた。同様に、マルクス以後、資本主義社会の中核に横たわる要素として、この商品生産を確認しつづけてきたのは、「マルクス主義者」たちだけではなかった。マルクスからその思想を受けついでいるこれらいわゆ

る「マルキスト」の、実に一部分（それは全く一小部分の人々なのだが）の人々だけが、この観点を持ちつづけているのである。そしてそれは、アナーキスト運動においても同様である。一部分（これもまた、ほんとうに一小部分の人々なのだが）のアナーキストだけが、この観点を持ちつづけている。主にその多くをクロポトキンから影響されたアナーキストが、一部分のマルキストと同様、市場のための生産という概念を確固として拒絶し、その認識に立って、彼等自身ふつうアナルコ・コミュニストあるいはリベルテール・コミュニストと称している。

とはいえ、私にとってマルクスはやはり、資本主義生産における商品の性格を系統的に分析した最初の人という栄誉に値するのであり、彼の「資本論」は今日もなおその重要さを失っていないと思われる。「資本論」がいかに重要であるかを考えるとき、たとえば、次のことが言えるであろう。「自分はマルクスの後継者だ。マルキストだ。」と声を大にして言いふらしている多くの人達の虚偽をあばくためには、マルクス自身の「資本論」こそ最良の判定なのである。マルクスの資本主義分析こそが、我々に次のことを正確に教えてくれる。すなわち、商品の生産をそのまま残しておこうとする考え、現存の価格と賃金の機構を維持しようとする考え、貨幣制度を分析しようとする意図のない考え、これら一連の考え（たとえばボルシェビズムに顕著にみられる）は、いずれも、現実的には資本主義社会に反対するものでは全くない。それらの考えを持っている限り、もはや資本主義への挑戦とは言われえないのである。「リベルテール」の読者の多くは、ボルシェヴィックが賃金制度を撤廃する（＝労働者の労働力の商品化を撤廃すること）意志のなかったことを知っているであろう。それは、アレキサンダー・バーグマンや大杉栄などのアナーキストが、レーニンやその一派の「我々は社会主義建設のために働いているのだ。」という公言の中に早くから見破っていたことであった。だが、次のことは読者諸君に耳新しいことかもしれない。これらアナーキストたちと全く同じ理由から、そして純正なマルキストの見解から、一九一七年直後に、②ドイツ労働者共産党（ＫＡＰＤ）と③英国社会主義者党（ＳＰＧＢ）は、レーニンとその一派に対して、アナーキストと非常に似た批判を公表していたのである。

資本主義には反対すべき多くの面（国家、物権的支配階級、天然資源と人間の浪費、等等）があるけれども、とりわけ、何が資本主義の基本的原動力であるかということになると、それは、一般化された広汎な交換の存す

る社会型態であるということができよう。品物は売られんがために生産される。市場でさばけるだろうと見積られた数だけ生産されるのである。言い換えれば、生産は人間の必要にも、また、人間が技術的に何を生産しうるかということにも関係ない。ひとえに、市場がその時その時に吸収しうるであろうものを推量することに、係わっているのである。別の方向から見てみよう。個人の消費は、その人が、その必要なもの、その趣味とするものを、自由に決めることによって決定されるのではない。その消費は、個人が自由にできるお金によって調整されるのである。かくして我々は、今日この誇らかに巨大な消費主義の時代においてすら、多くの人々が現実の欠乏（不十分な住宅設備はそのいい例である）に悩んでいるのをみる。人間の歴史上初めて、人間が、その幸福な生に必要な物を、真に豊富に生産するに十分な技術的能力を獲得した今、この時に！　人々はたとえば住宅の不足に悩んでいるのである。

日本、西ヨーロッパ諸国、アメリカに見られる社会の型は、明らかに以上述べてきた類のものである。しかし、ここで認識すべき重要なことは、私が上述した資本主義の型態はそっくりそのまま、ロシア、東ヨーロッパ諸国にもあてはまるということである。賃金、価格、貨幣、市場は、ロシア経済の機構なのだ。それはまさに、その経済の資本主義的性格を暴露しているものである。中国についてもまた同じことがいえるであろう。（少くとも、中国の工業化され商業化された地域において、という意味であるが。）　中国が現代世界に仲間入りするにつれて、その生産は世界市場に見合うようになされてきている。生産品を売るために、他の資本主義国家と競争しなければならないからだ。（ロシアの経験が明らかに示しているように）無鉄砲で独断的ないかなる「計画」も、市場のための生産という状態を変えることはできない。それどころか、絶えず世界市場の変動の支配の中に身を置き、その変動の結果として、いわゆる彼等の「計画」なるものを、後手後手にと変えざるを得なくしているのは、他ならぬ「計画者」自身なのである。

もしも、ロシアや中国のような国が④資本主義国だという事実を理解することが重要であるとするなら、さらに重要なことは、生産が商品の生産という型態をとるかぎり、資本主義は存在しつづけるであろうということを、はっきりと認識することである。社会に起った動乱がどんなに「急進的」であっても、それは問題ではないのだ。例えば次のことを想像してみよう。日本のような国で、（あるいは世界的な規模でといってもいい）　労働者が

立ちあがり、現存の権力機構をくつがえし、国家を撤廃し、生産手段を奪い取ったとする。更に想像してみよう。労働者達は、完全に民主主義的な方法で、生産を彼等自身で組織し、すべての上役、管理エリート、監督、職場長などから自由になったとする。⑤多くの人々にとって、これこそは我々革命家が長い間夢みていた社会そのものであるように聞えるであろう。多くの人々がこのような状態を「労働者のコントロール」あるいは「労働者の管理」として描いている。しかし、問題は、いったい何の「労働者管理」なのか？　市場の？　それは単なる幻想にすぎない。商品の生産が残存するかぎり、支配するのは市場であり、従順な傀儡のように踊らされるのは人間なのだ。

重要な点は、今日存在する資本主義社会において、労働者問題の根本的原因が、特権的な支配階級によって支配されているということにあるのではない、ということである。もちろん我々労働者は、特権的支配階級によって支配されている。しかし、彼等支配階級がこの社会を管理し、自由気儘に抑制しているのだと示唆することは、彼等に多すぎる賛辞を呈することになる。実はその「支配」は名目上のものなのだから。資本家が残酷か慈悲深いか、彼等にオベッカをつかう政治屋（田中など）たちが、堕落した悪漢か、純粋無垢の見本のごとき人物であるか、あるいはまた彼等の支配者たちが、贅沢三昧をつくしているか、（毛沢東主義者が公言している「北京の英雄たちのように」）つましく質素な生活をしているか、結局のところ、それらは、たいした問題じゃないのだ。市場が及ぼす圧倒的な力に較べれば、それらすべてのことは、たいして意味のない些細なことなのである。

「資本論」でマルクスが一九世紀の英国資本主義を検討したとき、市場の力が当時どのように作用しているかに、彼は気づいたのである。その頃の資本は、主にまだ、互いにその生産品を市場で売ろうと争っていた個々の資本家の手中にあった。ではこの競争は、どのような形をとっていたのであろうか。競争とは、それぞれの資本家が絶えず、より安く、より能率的（完全に資本家の用語において）に生産して、そのライバルより安値で売ろうと競うことであった。そして、これをするためには、彼等は絶え間なくその経営を拡張し、より最新の機械と設備をとりそろえなければならなかった。すなわち、（ちょうど、同じ場所にとどまるために、常に早く、より早く走らなければならない人のように）資本主義生産というジャングルの中で、単に生きのびるために、資本家は絶えず資本を蓄積しなければならなかったのだ。そして、

蓄積を達成するたった一つの方法は――かってないほど激しく、労働者階級を圧迫することであった。それは、労働者の賃金が絶対的な意味において減ぜられたということではない。資本家は全生産の増加に相対して、賃金を抑制する（労働者はもちろんこれに、できるだけ抵抗するべきだが）ために、最善をつくすということである。たとえ個々の資本家がたまたま真に優しい心の持ち主で、従業員の待遇を改善したいと望んだとしても、他のライバルとの競争がそれを許さなかった。破産という危険をおかすことなしに、彼の一存で、従業員の賃金を上げるということはできなかったのである。

今日の状態を見てみると、英国のような伝統的な資本主義国（国家資本主義ではないという意）においてすら、マルクスの時代の個々の独立した資本家はほとんど姿を消していることがわかる。競争の規模は徹底的に替わって今、資本主義社会における真の意味での競争は、たとえば日本の財閥のような巨大な会社の間で行われ、または、ロシアとアメリカというように、完全な国家資本の間で行われている。かくして、一九世紀にそうであったように、「競争」は激化し、そして、それは結局、労働者階級の悲惨によって償われているのである。これは我々が「今日存在する資本主義社会において、労働者の問題の根本的原因は、彼等が特権的な支配階級によって支配されているということにあるのではない」と言いうる理由である。労働者階級が経験している根本的な圧迫は、世界市場によって及ぼされているものなのだ。だから、現在その圧迫が、社会の特別な階層（資本家と、彼等のさまざまな追従者）を通じて、労働者階級に移されているという事実は、些細なことなのである。先にすでに暗示したように、たとえ社会の特別な階層が一掃されたとしても、商品生産が残存するかぎり、労働者の立場のたった一つの違いは、労働者が世界市場の影響を間接に受けるかわりに（今日はそうなのだが）、直接にそこに身をさらさなければならない、ということであろう。民主的に管理された工場その他は、品物を売らんがために互いに競争し、ライバルより安く売ろうと試み、より「能率的」に生産しようと努めるだろう。そして、労働者は、「彼等の」工場に新たに投資し、他の工場が達した蓄積のレベルに匹敵するために、彼等自身から「剰余価値」を引き出さねばならないだろう。すなわち、市場と、市場がもたらすすべての疎外勢力は、残るのである。ある社会主義者がこう言った。――「資本主義下の労働者よ。支配階級をつぶそう。しかし、商品の生産は残しておこう。」という考えは、古代ローマの奴隷制について、「奴

隷の持ち主から彼等を自由にしよう。しかし、ムチは残しておこう。」と言うのと同じくらいバカらしいものである。奴隷を打ちのめすのは、そのムチなのだから。「労働者の管理」（市場の管理！）という概念は、自分自身の背中をムチうちはじめるためにのみ、奴隷を主人から解放するという概念と全く同じである。革命的グループとしてフランスのNégation　（「拒絶」）は、Lip　（フランスの町）の「労働者管理」運動について、次のように述べた。「労働者管理」という考えは「Contrerevolution autogestionnaire」（自治管理的反革命）の一形態にすぎないのである、と。

では、いったい何が新しい社会の型であるのか。我々革命家が、その宣伝、煽動活動において、目ざすべき新しい社会のタイプとは何であるのか。未来社会のきっちりとした青写真を前もって作成し、それを人々に押しつけるようなことは、当然のことながら、我々の仕事ではない。資本主義打倒が成功するたった一つの革命は、それが圧倒的多数によって、自称指導者というもの無しに積極的に成しとげられるものでなければならないだろう。来たるべき社会のタイプをどのようなものにするか決めるのは、実際にその建設にとりかかった人々自身の責任なのである。しかしながら、我々はこの事は言いうると思う。新しい社会のイメージが、現段階においても、かなりはっきりしたある展望を持ちえないなら、資本主義を破壊することは、不成功に終るであろう。その新しい社会なるものは、真の意味で新しくないであろう。そしてそのような失敗の場合には、もちろん、また別の革命が必要になってくるであろう。

「月刊共同体」121号

阿木幸男氏の「アメリカ・コミューン廻りⅢ」に、ミネソタ州セントポール市にあるコミューン、『エンマ・ステファン』のことが紹介されている。『エンマ』はエマ・ゴールドマンからとられたものだそうで、メンバー七人全員がウーマン・リブ運動に関わったり、関心を持っているそうだ。彼らの生活は、夏二ケ月の果樹園での労働による収入によって支えられ、全員でみっちり二ケ月働き、あとの十ケ月はそれぞれに生活を楽しみ、ウーマン・リブの運動に、ピアノのレッスンに、アナキズムの雑誌発行に、等、それぞれのしたいことをすることのためにみんなが協力しあっているらしい。他に「インフレ克服と共同体」、「新しく地域社会形成への試み ― 大山町における協同体思想の展開」、「キブツの保育」他。

東京都渋谷区代々木4の5の14　参宮橋ハイツ10
社団法人　日本協同体協会

編集室

十月二七日、編集をもっと有効なものにしたいという欲求に従って約十名が発行所に集まった。以下、そこで話しあったことを個条書き的に記しておく。

一、編集員を確定し、それらの人々は一定時間編集のために労力を活用する。

一、「リベルテール」を無原則なものとすることなく、一定の基準を編集員は編集という作業を通して作っていく。

一、原稿は添削、付言することも編集員の考えにそって行なうことがある。

これらを少し説明すると、編集員は確定するが、特定の人に限定するということではない。又「リベルテール」の意図は編集という作業を通して表わしていきたい、ということで、原稿については編集会議が選択などをしていく、ということです。

（編集部）

夜の銀座を一廻りすれば日本の不平等を感じる。（ビル工事の跡片づけの人夫の横を、酔漢相手にムードピアノを弾いて日給一万円の、スーツ姿の若者がクラブからクラブへと足早に通りすぎる。そして新聞でおなじみの高級者の群）現実の虚飾への吐気を憎悪へさらに創造力へと導く糸にリベルテール誌はなり得るか？否、力になるために再確認そして出発。（甲斐一）

働きたかろうが、働きたくなかろうが、働いて金銭を得ないことには明日からの生活がこまる。こまりはしないのだが働きたくない所で働いて金銭を得ていた方が、他の人々の迷惑にならない。だから又働く。いやだ。いやなことはいやだ。もっとましな食うための労働の仕方があるはずだ。

時々自分ながらいやになることがある。電車に乗った。煙草をすっている人がいる。「禁煙だからよして下さい」なにを俺はいっているんだ。禁煙だからよせというのか。禁煙という規則だからやめて欲しいのではなく、俺にとって煙草の煙が迷惑だからよせ、というのだろう。

自分ながら自分のとっさに口をついてでてくる偏見にはへきえきする。こういう偏見がすぐ口をついてでてくるように俺がなってしまったのはなぜだろう。

い。今からだっていい。俺は新しい社会を空想しよう。そんな社会ができるよう、少しでもいい、力を入れよう。そんなことでもしないことには息がつまっちゃう。

（山本二夫）

十月廿七日リベルテールの会合を発行所で開きました。その時、編集陣をどう確立するかを討議しました。むろんこれまでの行きがかり、五年に亘る継続実績、会とリベルテール紙の関係等、話しあいましたが発行人と編集子とではギャップがあり即刻これを埋める迄には至りません。読者諸氏の意見を反映するにはどうするか、基調は第6巻第1号よりとりあえず、甲斐一、山本二夫、江藤敏和、はしもとを含む四名で再出発します。総括をしないい再出発には異論があるでしょうが、それは今後の紙面の製作でご寛容を願う次第です。

個人としての私は「長而不宰」（長じてしこうして宰（さい）せず）の心境です。介入や排除は認めず参加者の意見・才能が開花する場、善いものは善いなりにそれぞれの持ち味のでる紙面作りにしたいと思います。それに一本＜絹糸の線＞が通れば申し分ないのですが……。

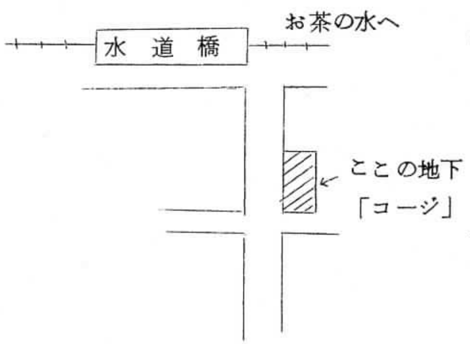
（はしもと）

リベルテール・サロン

水道橋東口下車　徒歩2分

毎週　火曜日　午後六時より午後八時すぎまで

ただ会話を楽しむだけの会ですが興味のある人はどなたでもどうぞ。



リベルテールの会では原稿を募集しています。各地の状勢等どんどん送って下さい。皆の協力がないと雑誌の発行はおぼつきません。よろしくお願いします。